

夏休み期間中、子どもの自由研究や読書感想文などの宿題を親子で取り組まれた家庭が多かったのではないのでしょうか。普段に比べ親子連れで図書館に来館する方が多くいらっしゃいました。前回はひきつづき、山梨子どもの本研究会 浅川玲子氏から、子どもと本を通して接し方について寄稿して頂きましたので紹介します。

親子読書のススメ

1 ブックスタートって

どんなこと



最近新聞や雑誌などで、「ブックスタート」という言葉を、目にしたり耳にしたことがあると思います。これは生まれてばかりの赤ちゃんに絵本を贈る活動です。この活動は、1992年にイギリスのバーミンガム市の教育基金団体が、「本で赤ちゃんを育てる運動」として始めたのが最初です。赤ちゃんに絵本をプレゼントされた家庭では、赤ちゃんはお母さんに抱っこしてもらい、その肌のぬくもりをかんじながら、お腹の中で聞いたお母さんの心臓の音とやさしい声

に出会い、心が穏やかになっていきます。絵本を読み聞かせると、自分に呼びかけてくれた言葉には、手足をばたばたさせてすぐに反応してくれます。

小さい子どもは、お母さんの読み聞かせが大好きです。絵本を仲立ちにして楽しいひとときを持つと、親子の絆は一層深まっていきます。

※都留市では4月よりブックスタート事業を本格実施しています。

2 親子読書を続けて

赤ちゃんのときから、絵本を読んでもらっていた子どもは、身近に置かれていた絵本をみると、一枚ずつめくり始めます。そして「読んで、読んで」とせがむようになります。

大人と子どもが一冊の絵本を通して、お話の世界を共有できる唯一の時間です。一日に10〜15分ほど時間を作り、生の声で心をこめて読んであげましょう。



子どもがふふふっと笑いだしたり、目に一杯涙をためたり、お互いの気持ちを通じ合います。読んであげる大人も自分の子ども時代の楽しかった思い出を呼びもどす時間になります。しかし読む人だけが一生懸命でもだめです。聞くのは子どもですから、無理強いをはいけません。子どもは読み聞かせの中でいろいろな言葉と出会い、すてきな絵本で感性を育てていきます。じっとしている時の少ない子どもでも、お気に入りの絵本はびっくりするほど静かに聞いています。子どもたちは、読み聞かせしてあげること、私たちが大人から子どもへのお金では買うことのできない大事な贈り物です。

3 大きくなってもしっかり読んで

子どもが「あいうえお」が読めるようになると、「字が読めるから、本も読めるはず」と思

いがちです。しかし子どもは文字が読めても、本の中から文字を追うのがやっとです。子どもたちは「じぶんで読むと何とも思わなかった本でも、読んでみたらと悲しい本は泣けてきたり、おもしろい本は声を出して笑っちゃう」といっています。小学校1・2年の子どもは読んでみたら、物語が身近になって、楽しみや読書の喜びを身につけることができるのです。子どもが小学校3・4年ぐらいになると、「もう一人で読むよ」と子どものほうからいつてくれるはず。そんな時大人は常に子どもがどんな本を読んでいるか、気をつけてみていきましょう。時には図書館へ行ったり、一緒に読みたい本を見つけたら、お母さんがおすすめの本を紹介するのも、よいことだと思います。

4 すくれた子どもの本を探すには

子ども時代は短いですから、心に残る本を読んであげたいと思います。子どもに本をすすめる大人たち(両親、教師、保育士、図書館員)はすぐれた子どもの本を選ぶために、次の点を参考にしてみてください。

①長い間読みつがれてきた本に出会ってみる。

②経験豊かな子どもの本の専門家を選定したブックリストを参考にします。

5 おすすめ子どもの本

◎元氣の出る本
くんちゃんの
はじめてのがっこう
ドロシー・マリノ作

がまんだがまんだうんちつち
梅田俊作 作・絵
びゅんびゅんごまがまわつたら
宮川ひろ 作

ポケットのないカンガルー
エミイ・ペイン 作

◎どきどきする冒険の本
めつきらもつきらどおんどおん
長谷川楦子 作

おしいれのぼうけん
古田足日 作

かいじゅうたちのいるところ
センダック 作
くわずにようぼう
稲田和子 再話

◎いのちと自然を考える本
さっちゃんのまほうのて
田畑誠一ほか 作

海をかえして
丘 修三 作

ぼくのおにいちゃん
星川ひろ子 写真・文

おおはくちようのそら
手島圭三郎 作・絵